

鈴木俊博先生の思い出

公立学校共済組合東北中央病院 病院長

田中 靖久（昭和五十四年入局）

四月二十四日、博多からの帰り、思わず、ふだんは手にしない備え付けのイヤホンを探し出した。およそ三五年前、初めて知り合った頃、夏休みの手伝いで由利組合病院を訪れた時に、鈴木俊博先生が教えてくれた懐かしい曲を機内誌に見つけたためだ。その歌手を全く知らなかった私は、カセットテープを買い求めて、しばらく運転中に聴いていた。「J. BOY」、「星の指輪」そして代表曲の「悲しみは雪のように」を聴いているうちに涙があふれてきて止まらなくなった。仙台に着き、病室の彼にメールで伝えると、「浜省は声が良いですね。先生に教えたことは忘れてしまいました」と返事が送られてきた。無念にも、この短いやりとりが彼との交流の最後と成った。

彼は映画が、とりわけクリント・イーストウッドが好きだった。私も同じだった。「ミリオンダラーベイビー」、「グラントリノ」、「アメリカンスナイパー」等々の多様

な作品を巡って、幾たびも意気投合した。彼にはイーストウッドの新作情報をいち早く教えて貰った。一昨年、いつも後塵を拝していたので、出張先の神戸で封切り直後の「ジャージー・ボーイズ」を鑑賞し、映画館を出てすぐに、ラストシーンの素晴らしさを伝えようと、未だ見ていない筈の彼に電話した。ところが、又、先を越されていた。わざわざ新庄から東京に出掛けていたのだ。今秋には「ハドソン川の奇跡」が公開された。その感動の思いは、最も語り合いたい彼に電話ができず、胸にしまい込むしか無くなっていた。

「三種類の人工靱帯の骨組織との親和固着性に関する組織学的研究」が、彼の学位論文である。家兎の大腿骨骨髓に人工靱帯の合成繊維を埋めて骨との固着性を検証した第一級の研究だった。彼のことだから、実験の計画や実施は極めて迅速に行われたに違いない。何しろ、学会発表の際には、既に投稿論文を完成させているという、医局の同窓者としては、相澤俊峰現准教授を除いて極めて稀有な存在だった。実験結果を定量的に解析する方法で壁に当たっていた彼を手伝う機会があった。一緒に組織標本を眺めると、少なくとも家兎では、骨を必要とする所では、例え異物であれ、それを核として貪欲に利用

し、あたかも内軟骨性骨化と同じように旺盛な骨形成が生じていた。一方、骨を必要としない所では、異物はそのまま放置され、貪食の反応すら皆無に近かった。彼の研究のおかげで、私達は少し賢くなった。新庄に戻る直前に書いてくれた、「損傷半月の組織学的観察」（東日本臨整会誌 7: 39-42, 1995）は、二人で摘出標本を観察した成果である。

一〇年前に見ず知らずの山形に赴任した私を、彼は真つ先に迎えてくれた。母上と共に、塩沢広重先生夫妻も加わり、村山市の丘の上の美しい自然に囲まれた「ひつじや」で、私ら家族は日本一美味しいジンギスカンをご馳走になった。その後、ひどい赤字だった東北中央病院に多くの患者を紹介してくれた。私を助けるために。芸術や文化のみならず、彼は人間の気持ちの揺らぎ、心の動きを深く理解していた。さもなければ、病室を見舞い、彼を励ます立場の私の方をあれほどに暖かに包み込んでくれようか。初めて面会した翌日にこんなメールが送られてきた。「昨日はすみませんでした。先生の言葉は心地よく、子守歌のようで、つつい眠ってしまいました」。

葬儀の最後の挨拶で、病室で世話をされていた妹さん

から参会者にお願いがあった。「どうか兄を忘れないで下さい」。その二カ月を経た頃か、彼が夢の中に出てきたことがあった。宴席で私の左側に座っていた。夢とは気付きつつも、絶好の機会を逃すまいと、一生懸命に彼に話しかけた。彼の声を又、聞きたかったからだ。彼は無言のままだった。夢は一瞬でさめた。でも、こうして彼を思い起こし、少しでも瞼を閉じると、鈴木俊博先生の笑顔、姿、そして話しぶりが生き生きと脳裏よみがえって来る。

（平成二十八年十二月記）